

第3回人権賞 受賞者 八杉 晴実（学習塾経営、1990年逝去）

【受賞理由】

東京都練馬区において約30年にわたり学習塾を経営し、学力不振児や不登校児などが子ども本来の生き生きとした姿に戻れるよう支援するなど、子どもや親の立場にたった真の教育活動に対して。

Q1 どのようなきっかけから「受賞テーマ」に取り組むようになりましたか。

1957年より学習塾を開いており、進学より補助を中心として普通の子どもたちと関わってきました。特に、当時「落ちこぼれ」と呼ばれる子どもたちに何とか学習を理解させようとし、また、落ちこぼされる原因（社会的、家庭的、学校的環境）を追求していましたので、事前にこのテーマに取り組むこととなりました。

同様に、仲間の弁護士さんたちの「子どもの学習権」等の研究会もこの取り組みのキッカケとなったかもしれません。

Q2 その活動には、どのようなご苦労がありましたか。

当時、「登校拒否」と呼ばれる子どもたちへの社会的な理解がなく、子も親も大変悩んでおりました。その子たちに手をさしのべるのに、地域の補修塾に呼びかけ、全国で500か所ほどの協力を得ましたが、頼ってくる親子は全国的なもので、絶対数も不足し、地域的な空白域も多くて思うように助力できないことが残念でした。その後、不登校も市民権を得て、子どもたちも堂々と生きられるようになり、やや改善されたように思います。

Q3 人権賞を受賞してどのような変化がありましたか。

活動している仲間に励みになったと思います。また不登校や落ちこぼれなどの研究会の発展形態である「家族ネットワーク」（本部・仙台）の活動に副賞を活用させていただきました。

Q4 「受賞テーマ」はどのように発展・継承され、現在はどのような活動状況となっていますか。

様々な子どもの問題は、子育てをしている家族の孤立もその一因であるので、家族どうし交流しながら子育てをと「家族ネットワーク」を発足させましたが、直後に本人が他界し、残った仲間だけでは力不足もあり、目下、休会状態で、会報を通して連絡をとりあっています。

Q5 あなたにとって、いま最も関心のある「テーマ」は何ですか。

（この部分は記入者である八杉悦子の意見である。）

自分を含め高齢者が増えてきましたが、こういった高齢者は以前の「老人」の範囲には入らなくなっていると思います。気力、体力、知力のある高齢者の大量の出現は、これまでの社会では経験のない事態であり、社会としてそ

の能力をどのように生かしたらよいか、老後をどのように生きてらよいか、この「新老人」の問題に関心をもっています。

※Qへの回答者 八杉悦子（ご遺族）